

高知工科大学国際交流センターの活動 ～留学生受入れから学生の海外派遣・研修まで～

伴 美喜子

(受領日：2010 年 5 月 10 日)

高知工科大学国際交流センター事務室
780-8502 高知県香美市土佐山田町宮の口 185

E-mail: ban.mikiko@kochi-tech.ac.jp

要約：高知工科大学国際交流センター(IRC)は博士後期課程特待生制度の創設に伴い、同プログラムへの外国人留学生のリクルート・受入れを主たる業務として、2003 年に開設された。当初は外国人留学生の受入れ全般にかかわる活動が中心であったが、徐々に日本人学生の海外派遣にも活動が広がってきている。昨年実現した初めての大型学生派遣事業、「KUT ヨーロッパ研修 2009」を中心に、IRC の活動について時系列的に紹介する。

1. はじめに

2008 年に政府の「留学生 30 万人計画」が発表され、2009 年には国際化拠点整備事業「グローバル 30」も開始された。本学からも同事業の公募説明会に参加したが、申請要件が厳しく、本学のような規模の小さな大学は始めから対象外とされた。小規模ながら、ユニークで、血の通った国際交流をどのように推進していったらいいのか。また、受入れと派遣をどのように有機的に結びつけたら、交流のダイナミズムが創出できるか、IRC の 7 年の軌跡を振り返りながら、本学の試みの一端をご紹介します。

2. 外国人留学生の受入れ

2.1. 博士後期課程特待生制度 (Special Scholarship Program)

本学は 1997 年の開学当初から外国人留学生を受入れてきたが、体制を整えて本格的な受入れを開始したのは、2003 年のことである。この年、当時の岡村甫学長の発案で、東京大学大学院工学系研究科土木学専攻の「英語による社会基盤・都市工学留学生教育特別プログラム」をモデルにした「博士後期課程特待生制度 (Special Scholarship Program, 以下 SSP という) が始まり、初年度は 27 名の留学生を博士後期課程に受入れた。その後も毎年春季と秋季に、年間十数名の SSP 生が入

学しており、2010 年 4 月現在延べ 106 名を受入れてきた。出身国の内訳は中国 76 名、タイ 8 名、バングラデシュ 5 名、カンボジア 3 名、ベトナム 2 名、モンゴル 2 名、その他ミャンマー、インドネシア、ネパール、インド、パキスタン、スリランカ、ウズベキスタン、ヨルダン、チェコ、ニジェールから各 1 名である。

SSP の目的は以下の 3 点に集約される。

①本学の研究スタッフとなり得る優秀な人材を海外から集めることにより、本学の研究活動の活性化を図る。②近年益々重要性を増している海外との教育・研究交流の基礎となる人的交流の促進を図る。③国際貢献の一環として発展途上国の国造り、人材養成に協力する。

本プログラムにより入学する留学生の在学期間は 3 年で、この間学費等が全面免除され、フルタイムの勉学を保证するために設けられたリサーチ・アシスタント謝金支給制度により年間 120 万円の給付を受ける。申請者は指導予定教員がホームページに公開している「研究プロジェクト」に応募し、書類審査の他、教員の出張による個別面接を経て、採用が決まる。研究上の使用言語は英語であり、日本語に関しては、来日後、「生活支援」の一環として提供される日本語教育を受けることができる。

2.2. 国際交流センター(IRC)の開設

国際交流センター(IRC)は、この SSP 制度の開始に伴い、外国人留学生の受入れを主たる業務として 2003 年に開設された。現在は、センター長を始めとする教員 9 名と IRC 事務室のスタッフ 4 名とで構成されている。主な業務は①大学間交流に関すること、②留学生の受入れ及び派遣に関すること、③地域の国際化への貢献に関することなどである。

2.3. 卒業生とのネットワーク

2006 年 3 月に SSP 第 1 期生が博士課程を修了し、現在 63 名の修了生が母国や日本の教育・研究機関等で活躍している。第 1 期生が帰国した 2006 年、中国とタイで高知工科大学(KUT)同窓会支部が設立され、今も修了生たちと母校の間で緊密な交流が続いている。IRC 事務室では、毎年末、修了生全員に言葉を添えてグリーティング・カードを送付しているが、この作業がメイリング・リスト更新にも繋がり、修了生全員の連絡先(電子メールアドレスを含む)を把握していることは、我々の誇りでもある。大学の規模が小さいから出来ることであり、また、早期に着手したことが効を奏したと思う。

3. 日本人学生の送り出し

3.1. タイ王国タマサート大学との交流

SSP 生の受入れがほぼ軌道に乗ると、次の課題は日本人学生の送り出しだった。SSP 第 1 期生を送った 2006 年、IRC が企画する初めての海外研修が実現した。

行先は大分前からタイ王国タマサート大学シリントン国際工学部(SIIT)と決まっていた。SIIT はシリントン王女の名を冠しており、1994 年に経団連等の援助も得て設立された教育機関であり、教育が英語で行なわれている点が特徴である。

SIIT の副学部長ソムヌック教授は岡村前学長の教え子であり、本学にも同教授の知己も多い。そのような人的繋がり、SIIT とは開学時より交流が続いていた。本学の初期の外国人留学生はほとんど SIIT からであったし、2001 年からは、本学からも毎年、1~4 名程度短期留学生を送り出していた。学長、副学長レベルや教員同士の相互訪問も実現していた。

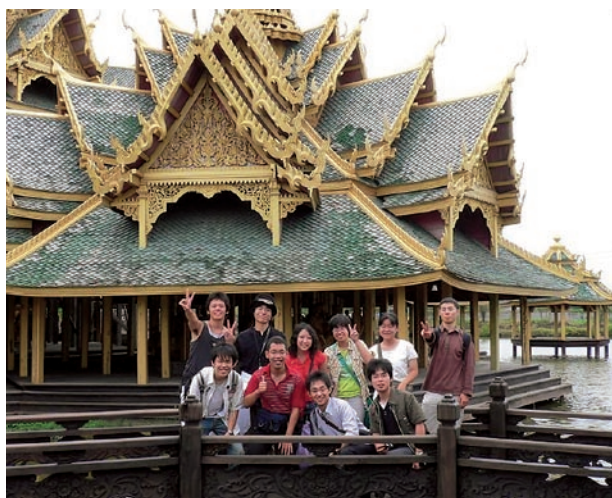
一時はチャーター機で学生を連れて行こうなどという夢のような話もあったが、第 1 回タイ研修の参加者は、EASEC(The 10th East Asia

Pacific Conference on Structural Engineering and Construction)への参加を兼ねた学生も含め、25 名だった。実施期間は 2006 年 8 月 3 日から 9 日まで、研修内容は SIIT の授業聴講、学生同士の英語によるプレゼンテーションやデスカッション、日系企業工場視察、タイの歴史・文化を学ぶフィールドツアーなどで構成された。

SIIT 側がプログラムの企画・実施に全面協力してくれたので、旅行代理店に業務を委託する必要がなく、また物価も安いことから経費を低く抑えることが出来た。

特記すべきことは一行の訪問時に KUT 同窓会タイ支部の設立総会が開催されたことである。EASEC 参加の打ち上げ、タイ研修、同窓会設立を祝った MK SUKI での学長主催夕食会は KUT ファミリーの re-union と新たな出会いの楽しい宴となった。

SIIT とは教職員、学生間の双方向交流が結実している。地理的、文化的な近さも起因しているかもしれない。1 年おいて、2008 年には第 2 回タイ研修を実施し、本年 1 月には SIIT の国際交流担当職員の招聘も実現した。



タイの文化、歴史、人の心の優しさに触れたタイ研修

3.2. 中国東北地方との交流

2 年目(2007 年)の海外研修先は、中国の瀋陽とハルビンだった。この時も、2006 年末に設立された KUT 同窓会中国支部が、本学との交流協定校である瀋陽工業大学、瀋陽薬科大学、東北大学などの協力を得て主催した第 1 回国際シンポジウム「Frontier Technology」の開催に合わせて実施した。

参加学生 9 名は 8 月 19 日より、3 日間瀋陽でシンポジウム関連行事に参加し、その後ハルビン

に移動、黒竜江大学で6日間の中国語・中国文化研修に参加した。同プログラムは本学の学生たちのために特別企画されたものであり、卒業生の協力を得て同大学に企画・実施を「委託」する形をとった。

本学は一貫して中国東北地方との交流を重視してきた。これまでに受入れてきた中国からのSSP生の約6割が黒竜江省、吉林省、遼寧省の東北3省からである。また、前述の大学の他、吉林大学(長春)、ハルビン工業大学、ハルビン師範大学、ハルビン工程大学など多くの大学と交流実績がある。因みに本学の中国人教員3名も東北地方出身である。

北京や上海などの南の大都市の大学には欧米を中心として、世界中からアプローチがあり、その中に分け入っていくことは容易ではないが「本学は既に北京理工大学(北京)、燕山大学(秦皇島)、復旦大学(上海)、華中科技大学(武漢)、西南交通大学(成都)、昆明理工大学(昆明)とは交流がある」、東北地方は地理的な近さに加え、歴史的な繋がりも深く、負の遺産がある反面、日本への親近感を持つ人も少なくないと聞く。また経済的にも、中央政府の「東北大振興政策」の下、近年発展が著しく、今後日本との関係が益々深まることが予想される。

「面」としての東北地方との交流を大切にしながら、中国の他の都市にも交流の「点」を更に広げていきたいと考えている。



2006年10月中国瀋陽でKUT同窓会中国支部が設立

4. 初のヨーロッパ研修

4.1. 企画・準備

2009年4月、本学は運営形態が私立大学法人から公立大学法人に移行した。日本全国で初のケースである。期待と不安でこの移行期を迎える中、4月末に佐久間健人学長よりIRCにもビッグ・サプライズがあった。「今年の学生の海外研修は

ヨーロッパを検討して欲しい」との指示が国際交流センター長にあったのだ。参加学生の人数は20名、派遣時期は9月、派遣期間は2週間。教員、職員も同行すべし。予算額も示された。

突然の大きな話にIRCとしては正直戸惑いもあったが、ビッグ・チャレンジと受け止め、早速準備に入った。

① まず、目的は次のように明文化された。

「学業・人物ともに優秀な有望学生に対し、海外の大学との専門領域の交流、学生生活についての交流・意見交換を通じて、将来の国際的活躍への動機付けと国際感覚・知識・見識の醸成を図り、同時に研究・教育の両面での大学間国際連携の基礎を形成・強化する。」

② 次に訪問先(交流相手)の検討に入った。ヨーロッパには交流協定校が少なく、唯一バレンシア工科大学(UPV)と実質的な交流があった。丁度本学の野中弘二教授が同大学の情報通信研究所に客員研究員として派遣されており(p.263『スペイン バレンシ工科大学滞在記』ご参照)、同教授のゼミの大学院学生も1名短期留学中だった。UPVからも延べ3名の短期留学生を受入れて来ており、4月にはUPVの国際交流担当職員の来訪があったばかりだった。候補の一つは迷うことなくUPVに決まった。

英語研修を兼ねることから、もう1カ国はやはり英国がよいだろうということになった。しかし、交流協定校はない。そんな中、面識のあったウェールズ議会政府東京オフィスの小堀洋子氏に協力を求めることを思いついた。東京に出向き、相談を持ちかけると、親身に応じてくださり、ウェールズ内のいくつかの大学を紹介してくれた。2週間後、その中の2校を直接訪問したところ、スウォンジー大学が本学の研修団を快く受入れてくれることになったのは、誠にラッキーであった。

ドイツも、という話もあったが、最終的には、英国とスペインというヨーロッパの対照的な大国2カ国を、じっくり見て回ることになった。

③ 次に重要なことは参加学生の選考であった。本学ではTOEIC受験を奨励しているので、応募者にはTOEIC受験を義務付け、その点数の上位者を参加させることにした。成績や面接で人物のチェックも行なった。応募者は73名と多かったが、残念ながら合格に至ったのは15名のみだった。厳しい選考を行なった点は、今回の研修の大きな特徴である。

④ 選ばれた優秀な学生の更なる成長に期待し、事前研修の充実にも努めた。

「対訳あらすじで読む英国の歴史」、「EUを知るための12章」、「日本—その姿と心」などを必読文献に指定するとともに、「研修に期待すること」についてレポートを提出させ（応募時と事前研修終了後の2回）、各人が研究課題を選んで発表を行なった。また、英国事情やロンドンの歩き方、ウェールズ事情、スペイン入門、ガウディの建築についてなどの講義も行なった。事前研修の冒頭では島弘国際交流センター長が「心構え」について話をし、最後は、かつてケンブリッジ大学で1年間研究生生活を送られた佐久間学長からの激励の言葉で締めくくられた。

4.2. 研修の概要

- ① 研修期間：2009年9月13日～9月27日
- ② 研修先：英国（スウォンジー、カーディフ、ケンブリッジ、ロンドン）
スペイン（バレンシア、バルセロナ）
- ③ 参加者：学生15名（学部生8名、大学院生7名）
教員5名（引率）
職員5名（内1名引率）
- ④ 主な訪問／見学先
 - 9月15日 テクニウム・スウォンジー訪問、カーディフ見学（グループ別行動）
 - 9月16日 スウォンジー大学訪問
 - 9月18日 ケンブリッジ大学見学（King's College, Cavendish Laboratory）
 - 9月19日 ロンドン見学（グループ別行動）
 - 9月21日 バレンシア工科大学訪問
 - 9月23日 サグラダ・ファミリア見学
 - 9月24日 バルセロナ見学（グループ別行動）

4.3. 学生たちの報告書から

帰国後、学生たちより報告書を提出させ、学生、職員それぞれの報告会や写真展も実施した。以下学生たちの報告書からの抜粋である。

①研修全般

当初期待していた、海外において現地の人々と交流することで文化や言語の違いを体感すること、また大学として今まで交流のなかった大学と新たに提携が結べるきっかけを作ること、共に大いに実現できたと思う。それ以外にも、普段接することのない先生や職員の方々のお話を伺ったり、宿泊先毎に、学部・学群や学年の違った人と寝泊りをすることで、今までの自分になかった考

え方や人間として見習うべきことを学ぶことができた、期待以上の成果があった。また、スリや盗難などを身をもって体験し、海外に出るものの怖さも知ることが出来た。このような理由で、今回のヨーロッパ研修は大成功だったと思う。

②生きた英語の習得

日を追う毎に、英語の聞き取り能力が上がった。状況から相手の言いたいことを予想する、ボディランゲージを駆使するなどのコツを掴み、言葉は話し相手の体全体から滲み出ていることに気づいた。コミュニケーションが成立した時の喜びは言葉で表せないほど大きかった。

③大学訪問

スウォンジー大学は大きな大学で学生数も多く、色々な国籍の学生がいて活気に溢れていた。建物も新しいものばかりではなく、200年以上も前の建物も存在していて、伝統が生きていた。また、大学の中にスポーツ施設、映画館、パブなども設けてあり、学生に勉強だけでなく、学生同士の交流やリラックスできる場所が整備されているのが印象的だった。

研究室訪問では、いくつかの先端的な研究を見ることが出来た。

④ケンブリッジ大学見学

キャベンディッシュ研究所を訪問した。ケンブリッジ大学で研究し、ノーベル賞を取った多くの学者の顔写真が飾られてあった。トムソンやラザフォードらが使った実験器具も飾られていたが、どれもシンプルで、本当にこれでノーベル賞を取ったのかと思うぐらいで、偉大な科学者なんだと圧倒させられた。

⑤英語で発表

研修の中で一番大きな学びとなったのは、2つの大学でのプレゼンだ。先生方に数多くのアドバイスをいただき、伝え方、ストーリー、ユーモアの重要性を学んだ。海外で英語による発表を行なうのは初めての経験で、不安も大きかったが、時には笑いもあり、皆興味を持って聞いてくれ、嬉しかった。

⑥学生間交流

バレンシア工科大学では、ランチタイムに日本に興味のある学生と交流出来たことがとても印象的であった。日本語を上手に話す学生も多く、人間は興味があることならば、短い時間でも多くのことを吸収し、更に知識の深いところまで追い求めることが出来るのだと驚かされた。夜も一緒に過ごしたが、密度の濃い交流が出来、研修中、最

も楽しいひとときだった。



バレンシア工科大学の食堂で楽しく交流ができた

⑦ヨーロッパの建築

- ・ 建築を勉強する者にとって、ヨーロッパの町並みを生で見る事が出来たことは幸せであった。歴史的建造物と近代建築の調和に心打たれた。
- ・ 正直なところ、私は建築には興味がなかったが、サグラダ・ファミリアを一目見て、その思いは打ち砕かれた。ガウディの建築物に感動し、彼の一生を辿ってみたいと思った。



ガウディ建築の衝撃－サグラダ・ファミリアにて

⑧日本との比較

- ・ ヨーロッパの人々はテンションが高く、幸せそうに暮らしていた。両親が子供や家族のために割く時間も日本より多いようだ。日本人は自分の楽しさ、自由さを押し殺しているように感じる。
- ・ 階級社会である英国に比べ、日本人は平等である。全体的に裕福な人が多いため、多くの人が平等に多くのチャンスを与えられている。しかし、受動的な性格があるため、このチャンスを活かし切れていない。
- ・ 宗教は、日本とは最も違う点である。今回の研修では多くの教会を見たが、訪れる人たちは2パ

ターンに分かれていた。観客として訪れている人たちと信心から訪れている人たちである。日本人の宗教を馬鹿にしている心は恥ずかしいと感じた。宗教は他国を知る一つの視点であると考ええる。

⑨教員から学んだこと

数々の貴重な話を聞くことが出来たが、「海外に来た時に一番大事なことは、英語を使えるようになることよりも、社会システムを知ることだ」という話が特に心に残った。将来仕事で海外に行く機会も多いと思うが、社会システムを理解できるような目を養いたい。知識量の多い先生との会話はとても勉強になった。

⑩大きく成長

この研修を通して、色々な面において大きく成長出来たと思う。うまく言葉で表現できないが、日本に帰国してから、人やモノが今までとは違った見え方をするようになったこと。また KUT では機械工学を専攻し、大学院に進みたいというはっきりした将来の目標が定まり、勉学により一層積極的な姿勢で挑もうとしている自分に気づいた。

⑪今後のこと

日本という国に改めて視点を向け、日本とはどういう国なのかを改めて勉強し、日本が更になるよう一国民として支えたい。

YES, WE CAN !



KUT Boys @ウェールズ・ガウワー半島

4.4. 成果と課題

今回の海外研修は、トップダウンで実現した画期的な事業であった。また事業を「多角的に活用する」こともかなり達成できたと思う。総括すると、以下の通りである。

- ① アジアからヨーロッパへと事業対象地域が拡張され、新たな国際交流のきっかけ作りとなった。
- ② 学生、教員、職員との全学的な交流が図れた。特に学生には研修中、宿泊先毎にルームメイトの組み合わせを変えるなどの「仕掛け」をすることにより、専攻や学年を超えた学生同士の深い交流が実った。
- ③ 海外研修の質的向上を図ることができた。
 - ・ 優秀な学生を更に伸ばす試み
 - ・ 学生の自主性、自発性の涵養
 - ・ 事前研修、事後報告の徹底
 - ・ 危機管理への対応
- ④ ヨーロッパ滞在中は天候に恵まれ、旅行時期としては素晴らしかったが、訪問大学が夏期休暇中、または直後であったため、学生間の交流の機会を十分に作れなかったことは残念である。次回は訪問時期について慎重に検討する必要がある。

5. おわりに

以上、IRCの活動を紹介しながら、受入れから派遣へという本学の国際交流の発展の軌跡を追った。もちろんこれらの活動以外にも、IRCが直接関与せず、部局や個人単位で活発に行なわれている本学の国際交流事業が多数あることは言うまでもない。別の機会に紹介されることと思う。

本学の国際交流の最重要項目は、引き続き、優秀なSSP生の獲得、受入れ、卒業後のフォローアップであることに変わりはないが、今後は既に始まっている多様な形での短期交換留学生の受入れについても制度を整備していく必要がある。

また、今回の「KUTヨーロッパ研修2009」を一つの大きなステップとして、人材育成を目的とする、日本人学生の「海外研修」を更に充実させ、海外への短期留学を奨励していく必要があるだろう。日本人学生の「国際化」が、相乗効果で、本学の留学生受入れ事業を更に発展させることにもなると思う。

「受入れと派遣はコインの裏表」とは、山本甫関西外国語大学理事・国際交流部長の言葉である。小規模ながら、地道に一步一步、「持続する」真の国際交流の花を咲かせていきたいと願っている。



ケンブリッジでは佐久間学長(前列右より2人目)が合流してくださった

Activities of the International Relations Center at Kochi University of Technology

～ from receiving foreign students to sending students abroad ～

BAN Mikiko

(Received : May 10th, 2010)

International Relations Center, Kochi University of Technology
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782-8502, JAPAN

E-mail: ban.mikiko@kochi-tech.ac.jp

Abstract: The International Relations Center (IRC) was established in 2003, when the Special Scholarship Program for Doctoral Students started at KUT. The aim of the program is to support advanced research conducted at KUT by accepting highly capable international students.

At the beginning, IRC's activities were concentrated on recruiting, selecting and providing maximum support to foreign students attending KUT.

A few years later IRC expanded its activities to involve sending Japanese students abroad. In 2006, a study tour to Bangkok was conducted followed by a study tour to China in 2007. In 2009 a study tour to Europe was carried out under the initiative of President Sakuma.

In this report a brief history and activities of the IRC will be introduced with special emphasis on '2009 KUT Study Tour in Europe', which was truly a challenge for the IRC.